



写真-1 福富橋から岸田川下流を撮影（平成27年5月）

■ 室戸台風による大災害を契機として大改修を実施

上の写真-1は、一般県道竹田指杭線の福富橋から岸田川下流を撮ったもので、青色の桁の橋は清富橋（町道橋）、その下流に架かる赤色の二ルセンローゼ橋は白馬歩道橋です。

昭和9（1934）年9月21日に高知県室戸岬付近に上陸した室戸台風は、記録的な最低気圧・最大瞬間風速を観測し、兵庫県においては、死者が281名、住家の全壊1,414戸、半壊2,788戸、流失708戸、床上浸水14,783戸、床下浸水38,245戸にのぼり、とりわけ淡路・阪神・但馬地域の被害が激甚でした。

岸田川流域では、19日から21日にかけて総雨量246mmを記録（浜坂）し、壊滅的な被害が発生しました。

災害直後に「但馬の激甚災害地を廻って河川改修の必要な区域を選定して河川改修計画を樹立し一週間以内に提出せよ」との指令を受けて現地を踏査された県職員の一人が、『河川事業50年の歩み』に次のような回想を寄せられています。

「これまで調査した竹野川・佐津川・矢田川・岸田川の河川沿いは一枚の耕地も残さず山から山まで完全に河原と化して、所々に道路と堤防の姿が残っている状態であった」。



写真-2 清富橋から岸田川と久斗川の合流点を撮影

この災害を契機として、岸田川は沿川住民の総意の下、“川替え”（河川の付け替え）を含む大改修に着手します。

事業区間は河口付近から竹田（国道9号沿いの「NAKAKEI」付近）まで。昭和12（1937）年に着工、戦争の影響で事業進捗ははかばかしくなく、昭和21（1946）年ようやく竣工の運びとなりました。

■ 岸田川の流路変遷をたどる

岸田川下流部は“川替え”により現在の河道になったわけですが、では大改修以前の岸田川の流路はどうだったのでしょうか。明治 31 (1898) 年の地図 (図-1) を見ると、岸田川は二日市地区の「切り割り^{※1}」から大家神社^{※2}の前を北へ流れ、久斗川 (くとうがわ) に合流しています。不自然な流路形態から、その昔、人為的な力が働いたのは明らかです。ということで、今回は岸田川流路変遷の歴史をたどってみようと思います。

※1 切り割り：二日市地区周辺に「切り割り」という小字名はない。おそらく過去に人為的に山を切り割ったことから、通り名として地元で呼ばれていたものと考えられる。

※2 大家神社：旧岸田川開削によりなくなったのか、この神社には鳥居がない。

■ 江戸時代のはじめに清富藩主・宮城豊嗣が岸田川を付替え

岸田川に架かる清富 (きよとめ) 橋を渡り、清富集落の中をしばらく行くと、岸田川の右支川・田井川に架かる橋に出ます。(写真-3) その親柱には「御屋敷橋」と記されています。(立派な親柱とガードレールの高欄がちよっとミスマッチ) 御屋敷とは、江戸時代初期にこの地を治めていた宮城豊嗣 (とよつぐ) の陣屋、すなわち清富陣屋を指すものと思われます。

橋を渡ってしばらく行くと右手に低い石垣があり、その上に「清富陣屋跡」の石碑が建っています。碑文の内容は下記のとおりで、その中に豊嗣の事績のひとつとして岸田川の付け替えが記されています。



写真-3 御屋敷橋から清富陣屋方向を見る

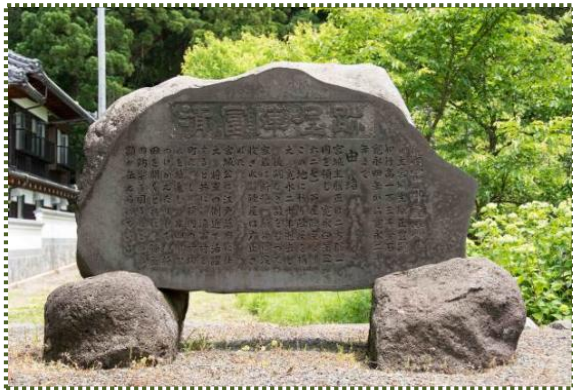


写真-4 「清富陣屋跡」の石碑

清富陣屋跡
領主 宮城主膳正豊嗣
知行高一万三千余石
寛永四年から寛永二十年まで
由緒
宮城主膳正は二万郡一円を領し、寛永四年(一六二七) 芦屋陣屋よりこの地に移り陣屋を構え、寛永二十年逝去し、後嗣なき故をもつて家名は断絶、所領は没収され陣屋は廃止された。宮城公は江戸幕府に仕え、將軍の側近で活躍すると共に、清富村を町だてし、領内の村切れ[※]を推進し、岸田川をつけかえたりして、新田を開くと共に、陣屋の防禦を図るなどの事績が伝えられている。

石碑の碑文

宮城豊嗣は、慶長 10 (1605) 年、上級旗本・宮城頼久の子として伏見に生まれました。慶長 14 (1609) 年に頼久が没した際に家督を継ぎますが、まだ幼少であったため祖父の豊盛が後見人となります。元和 6 (1620) 年豊盛が没したことで、その遺領を合わせて相続し、寛永 4 (1627) 年備中国や美濃国に点在していた所領をまとめることが認められ、二方 (ふたかた) 郡全部 (岸田川流域が大部分を占める) と気多 (けた) 郡の四ヶ村 (現在の豊岡市竹野町三原、日高町藤井、稲葉、庄境) およそ一万三千石を支配する大名^{※4} になります。このときに芦屋陣屋を観音山南麓の清富に移し、清富藩を立藩します。観音山は中世に相應峰寺城があった山で、その麓に陣屋が築かれたわけです。

これより 16 年間にわたり清富陣屋時代が続きますが、豊嗣は寛永 20 (1643) 年に 39 歳で急死、嫡子がいなかったことから宮城家は断絶、所領は没収され、その後、天領となりました。

豊嗣の事績としては、寛永の検地、清富集落の碁盤の目のような道づくり、岸田川の付替えなどが挙げられていますが、筆者は特に岸田川の付替えが気になります。低い山とはいえ、わざわざ山を切り割ってまでして岸田川を付け替えたのはなぜでしょう。

※3 村切れ：それまでの中世的郷村を今につながる近世的農村に小さく区切ることにより、年貢収納の責任体制を明確にして納入率アップを図った。検地帳によると、例えば、杉谷は古市・新市に、細見谷は赤崎・和田に、久斗谷は久斗・高末・辺地・正法庵に区切られた。

なお、清富陣屋の防御のため、という理由については、わざわざ岸田川を付け替える意味があったのか、いささか理解に苦しむところがあります。

岸田川付け替え後の河道の状況は、図-1 とほぼ同様と思われますが、付け替え前の河道はどうだったのでしょうか。『濱坂町史』には、清富地区の古老の話として「昭和 12（1937）年の河川改修工事に参加した際、祖先から聞いていたごとく、現在の川筋を造る工事中、大昔の川底から杭や古木の大きなのがたくさん出てきた。」と語り聞かせてくれる人がいる、と記されています。

もし、岸田川の元々の川筋が概ね今の川筋だとすれば、清富陣屋は北と東は山を背にして、南と西は田井川、久斗川、岸田川が内堀、中堀、外堀の役目をしていたので、わざわざ岸田川を付け替えるには及ばないように思います。

※5 江戸城外堀の拡張工事：寛永 13（1636）年に行われた江戸城外郭の修築工事は寛永期の天下普請のひとつで、石垣担当 6 組 62 大名、濠担当 7 組 58 大名の合計 120 家により、飯田橋から四谷、赤坂を経て溜池までを掘り抜き、石垣・城門を築いた。

■ 明治 31（1898）年の地図から見えてくるもの

（1）岸田川の元々の川筋

岸田川の元々の川筋は概ね今の川筋と書きましたが、二日市の山に当たった岸田川が、向きを北北西方向に変えて、そのまま河口まで素直に流れるとは思えません。おそらく、西に向きを変えて田君川左岸の山にぶち当たり、そこで向きを北に変えて、田君川の流路に沿うようにして清富陣屋の方に向かい、久斗川に合流していたのでは、と勝手に想像しています。

（2）田井川の最下流部は久斗川だった

上の地図から、久斗川は「浜坂温泉保養荘」の南を流れていたことがわかります。恐らく昭和の大改修により清富集落の南で岸田川と久斗川を合流させたことから、久斗川の下流部は田井川になり、一部は埋め立てられたものと思われます。そのため、田井川の下流部は広がった久斗川の名残りが見られます。

■ 清富集落の南辺には「二線堤」

清富集落の南辺には二線堤が今も残っています。清富橋を渡ってすぐ右折し、久斗川の右岸堤防上から清富集落の方を見ると二線堤が見えます。

久斗川の堤防が決壊あるいは越水した場合でも、家屋の浸水被害を最小限にとどめる役割を果たします。いつ頃、つくられたものでしょうか。

※ 二線堤：本堤背後の堤内地に築造される堤防のことをいい、控え堤、二番堤ともいう。万一、本堤が決壊した場合に、洪水氾濫の拡大を防ぎ被害を最小限にとどめる役割を果たす。

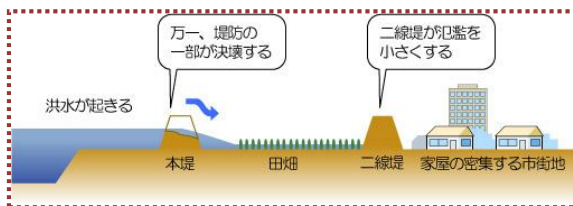


図-2 二線堤（国土技術政策総合研究所 HP から引用）



写真-5 清富集落を守る二線堤（久斗川右岸堤防から撮影）

■ 幕末、岸田川の“川替え”を計画する

岸田川や久斗川、さらには田井川の下流部に位置する清富村（現・新温泉町清富）は、大雨の度に浸水被害を受けていて、その大きな原因であった岸田川を川替えることは、村人の永年の悲願でした。

清富村年寄であった田中与七郎^{※6}は、幕末の頃から岸田川の川替えをするべく、実地測量を行い川替計画を作成、関係官庁への働きかけ、関係する村人の説得に奔走しました。明治 13（1880）年頃には兵庫県も改修に向け働きかけましたが、岸田川の新河道予定地は良田の地であったことから地主たちが反対し、さらに一部の村も反対、加えて請願した与七郎本人が死去したことから、川替計画は立ち消えとなりました。

この計画が一転して実現に向け動き出したきっかけは、昭和9（1934）年9月の室戸台風襲来です。壊滅的被害を受けた岸田川沿川の村民は全戸の総意として川替えを願い出たそうです。

※6 田中与七郎：与七郎は、清富村庄屋・第13代与右衛門の弟・与助から分かれた家で、与七郎は与助から数えて6代目にあたる。与七郎は、幕末期は清富村年寄として庄屋・与右衛門（田中本家第20代）を補佐、維新後は副戸長として戸長・田中助八郎（本家第21代）を助け、清富村政に貢献した。安政から万延（1854～61年）の頃、田井川の川替えに参加。以後、その経験を生かして、慶応2（1866）年から明治14（1881）年頃まで岸田川の川替えに情熱を注いだ。

■ モノローグ

今回の「岸田川付け替え」については、浜坂先人記念館「以命亭」の元館長で郷土史家の岡部良一さんにいろいろと教えていただき、貴重な資料までいただきました。加えて、室戸台風災害後の岸田川大改修の写真も複写させていただきました。

これらの貴重な資料をわずか4ページにまとめることはきわめて困難なため2回に分割することとし、今回は江戸時代の岸田川の付け替えをテーマとしました。次回は昭和の大改修です。

カキツバタ（燕子花、杜若）

アヤメ科アヤメ属。湿地に群生し、5月から6月にかけて紫色の花を付ける。アヤメとカキツバタ、ショウブ、ハナショウブはよく似ていずれもアヤメ科アヤメ属、さらにアヤメとショウブはどちらも漢字で書くと「菖蒲」なのでややこしい。

①「ハナショウブ」（花菖蒲）②「アヤメ」（漢字で書くと菖蒲）③「カキツバタ」（杜若）の3つの簡単な見分け方は花卉の元にある。

黄色の目型模様がハナショウブ、網目模様がアヤメ、白の目型模様がカキツバタ。



写真-6 清富陣屋跡近くの湿地に咲くカキツバタ

【参考資料】

- 1 『濱坂町史』 浜坂町役場 昭和42年4月
- 2 『兵庫の河川事業50年のあゆみ』 兵庫県土木部河川課 平成3年3月
- 3 『平成16年度企画展～川替えと村絵図展―清富・田中家文書の世界―』 浜坂町先人記念館
- 4 『大名、江戸城、カキツバタ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成28（2011）年10月 『ひょうご水百景』No.65

改訂：令和8（2026）年5月 『ひょうご水百景』No.65